

飛行兵、衛生兵の従軍記

富山県 小林 義次

私は、大正十（一九二一）年九月二十七日、富山県滑川町で生まれました。昭和十六（一九四二）年五月、徴兵検査を受け第一乙種合格でした。

昭和十七年七月十五日、千葉県柏の東部第一〇二部隊へ現役入営しました。私は入営以前は舞鶴の海軍工廠で蒸気タービンの仕事を二年余り、当時の徴用工として働いておりました。入営の直前、工廠を退職して廠内の関係先を入営、退職の挨拶をして回りました。結果としては餞別集めになりましたが、皆気持ちよく送り出してくれました。入営に際して、故郷では往年のような盛大な歓送はしなくなり、家族親族のみのささやかな見送りでありました。

その当時の我が家の家族は、

祖父 健在 農業

祖母	〃	〃
父	〃	〃
母	〃	〃
長兄	〃	〃
次兄	〃	出征従軍中
三兄	〃	〃
本人	〃	舞鶴海軍工廠
妹一人	〃	勤め

と農家ですから、現金収入は乏しく、私も工廠での給料の大部分を実家へ送金していました。そんな経済状態ですから、私の入営は打撃でした。しかしその時の社会情勢は戦時色一辺倒、入営は男児の本懐、祖父や父より「元気で御奉公に励め」と言われて故郷を離れました。

柏の東部第一〇二部隊とは第四航空教育隊で、その第二中隊へ入営しました。隊の内部では整備、警備、機関砲、その他等に区別されていましたが、入営して三カ月間は新兵教育で、みんな同じく歩兵の新兵さん同様の基礎教育でした。班内に入る

と例の内務班地獄です。例のビンタ！ 今思い出してもゾツとします。訓練では匍匐前進。軍隊生活の労苦の結晶の代表と言えましょう。

その内に私は何の因果か、衛生兵を命ぜられました。自分の考える力の中でも、納得のゆかないことでしたが、これも命令とあれば致し方なしとあきらめました。

昭和十七年十月、宮城県第二陸軍病院へ分遣されて教育を受け、昭和十八年三月、その教育が終了し、原隊復帰。次はいよいよ外地へ行くことになりました。

柏より下関、釜山、図們、牡丹江省内へと本隊を追及して行きました。人員は五、六人です。満州へ着きました。本隊の主力は既に出動して残置部隊として約百人いました。その中へ編入されて、再び列車輸送となり、ハルピン、奉天、北京、石家荘、太原と進みました。

太原には約一年間いました。次いで北京へ移り

ました。北京の南園です。隼第二〇七飛行場大隊、第八三二七部隊と言っていました。次に山東省の済南の第十五野戦航空修理場へ転属となり、昭和十九年六月三十日まで約一年間いました。最後に朝鮮・京城の近くの金浦飛行場へ行き、そこで終戦になりました。

振り返って考えて見ると、満州、中国では食糧はまあまあ豊かで空腹になることはなく、朝鮮では食糧は極めて少なく、空腹でした。この栄養、基礎体力の問題は個人の努力、責任の範囲外のこととで、私の任務上、隊内の兵員の保健維持のためにも、何とかせねばと考えるも所詮叶わぬことでした。その中で身近な戦友、上官等の一部の人には、葡萄糖の注射を内緒で行っては喜んで貰ったこともありました。

山東省の済南では、特別操縦見習士官の部隊があり、戦闘機乗りの訓練をしていました。この人達は内地の鹿児島県の知覧飛行場より沖縄へ特攻

隊員として飛び立って行った若人達で、済南でその事を知らされた私達も直接には何もして上げられないが、心の中では手を合わせて、若い殉国の権化となる勇士の冥福を祈ったことでした。

またこの済南ではよく敵の米支空軍P51の攻撃を受け、地上の友軍の飛行機はよく焼かれ、兵員もよく死傷し、損害を出し、犠牲を強いられました。

私達衛生兵もこの戦場では忙しく、包帯、担架、注射、投薬等と目まぐるしい状況でした。そして情けないことには、敵の飛行機ばかりで、味方の飛行機は一つも出て来ない。制空権は完全に失っていたことでした。公の場では言えなかつた事ですが、蔭で密かにコソコソと敗戦を予期する情けない場面もありました。

とは言え、普通空襲と言えば退避、防空壕入り等と防戦一方ですが、防空銃火器、高射砲隊、衛生救護隊、病院隊等はここを先途と勇戦力闘してくれます。不肖私もおかれてはならじと働かせて

貰いました。運良く怪我もせず、故郷の父母、神仏へ感謝の祈りを捧げたこともありました。

この済南へは敵機が遠く四川省の成都より爆撃に来て活躍していたとの情報もありました。何しろ制空権は一〇〇%皆無の日本軍ですから敵軍は思い通りに行動していたと思います。かつて五、六年前には日本海軍機が内地の九州より長駆、重慶爆撃を敢行したことを思い、今昔の感また一入でありました。源平の昔より「治乱興亡、まさにこの世は一局の碁なりけり」と言い伝えられています。

さて、人事と功賞について述べます。

私の聞いた話では、歩兵部隊員が駅のプラットホームに立ち、貨車に積み込んである資材の警備に任じていました。そこへ敵機の爆撃があり、近くへ爆弾が落ちて爆発した。その爆風でその兵は吹き飛ばされて戦死した。部隊では一階級進級させて遺骨を故郷へ帰した由。その兵の隊長や人事

係、功績係はよく考えて兵や遺族に喜んで貰える処理をしました。その事が隊内に知れ渡り、隊員はすべて隊長、事務室に感謝、信頼を厚くして爾後の部隊の士気昂揚に大いに貢献したとのことでした。上に立つ者のちよつとした心配りが大事であるとの戦訓です。

もう一つ。ある兵が歩哨勤務で立哨勤務で立哨していましたが。警戒を厳にして服務している筈が、どうした事か？ 居眠りしてしまつた。そこへ運の悪いことに巡察が来て見付けられて、起こされ注意をされました。立哨が終わり兵は下番して、その一件を歩哨の司令へ報告。大変な騒ぎとなりました。帰隊後その兵は落ち込んでしまつて、数日して自殺したのです。死亡後現在の階級のまま遺骨を返した由。何とかできなかったのか？ 身から出た錆とは言え、人生の冷酷さを思い知らされる一幕でした。

ついでに戦場の雑感を一つ

アメリカ軍の飛行場建設は早いの一語につきます。ブルドーザー、ローラー、その他機械力をフルに駆使して鉄板（穴があいている）を敷いてハイ終わり。彼我の総合戦力の格差を目の前に如実に見せつけられると、もう複雑な思いにかられるのは私ひとりではない。下手な無理な戦争を強行したものよ！ と思います。

先述の通り金浦飛行場で終戦を迎えました。部隊長の声涙ともに下る悲壮な訓示。将兵一同声もなく虚脱状態。その内朝鮮人の尖鋭分子が徒党を組み「日本人打倒、自治権獲得」そして兵器、物資の掠奪が始まり、瞬く間に、それは早く、広く拡大して、日本軍も対抗手段をとるのに苦心しました。永年の虐げられた恨みの爆発だろうか。

とにかく十月の中旬日本へ帰国して復員しました。家族に迎えられて自分の身の幸せをかみしめました。家族に迎えられる事がない。近所の親しい大工さんに弟子入りして建築大工となり、平成四（一

九九二）年病気になるまで続け、病気で廃業して今日に及んでいます。

結婚は昭和二十三年でした。妻は元気で娘四人を産んでおり、孫は六人。皆元気で毎朝お天道様に感謝しています。

いろいろな事を思い出しますが部隊にいた頃に、戦友仲間と言い合った言葉に「弾丸は前から飛んでくるばかりではないぞ」と不穏なことがあります。筋の通らぬ我ままな先輩や古兵、上官への牽制だったと思います。

戦死の噂だった私が

無事復員

秋田県 庄司 信一

私は、大正十（一九二二）年五月五日、端午の節句に現在の大館市花岡町で生まれました。家族は鉾山で働く父、家事を守る母、それに二男三女で私が長男です。

ここでちょっと、私の生まれた花岡と言う所を紹介しますと、日本屈指の銅を生産する花岡鉾山の在る所で、秋田県の北端に位置し、青森県との境で大館盆地に在ります。一般に鉾山と言えは人里離れた山奥と思われ勝ちですが、花岡鉾山は、田畑の下部を採掘しております。

また、十和田湖、八幡平の秋田県側からの玄関口でもあります。花岡鉾山は明治十八（一八八五）年に地元の四人の方が発見し、鉾石の種類は銅、亜鉛、鉛、石膏、硫化鉄鉾（肥料の硫酸アンモニ